

陸軍省城絵図にみる岡崎城と浜松城 ～幻の城郭存廃調査記録より～



陸軍省城絵図 三河国元岡崎県図 本丸二の丸部分（しるはく古地図と城の博物館富原文庫所蔵）

注目される家康の城郭絵図

徳川家康公400回忌顕彰事業で生誕地岡崎市や浜松市、静岡市は大きな賑わいを見せている。岡崎城、浜松城、駿府城は岡崎公園、浜松城公園、駿府城公園として熱心に保存整備され、市民の憩いの場となり、城郭の変遷や城郭絵図の研究も盛んである。しかし、全国の城郭がそうである様に、何れの城郭も明治初期廃城時の経過は未知のままである。

明治政府陸軍省築造局によるこれまで知られることのなかった城郭存廃調査は明治5年3月18日から8月に実施された。明治5年1月17日すでに兵部省管轄となっていた静岡城（駿府城）は含まれていない。今回、調査対象とするのは明治5年陸軍省に提出された岡崎城絵図3枚と浜松城絵図2枚である。城郭図の基本は正保城絵図と陸軍省城絵図、修理絵図といわれる国幕用図であるが、岡崎城、浜松城ともに正保城絵図は失われている。陸軍省城絵図によって、今回初めて、両城の城郭破壊の過程が明らかにされることとなる。紙面の関係で割愛しているが、絵図調査の前提として徳川家康前半生の所蔵絵図を確認、岡崎城、浜松城を含めて桶狭間から、長篠城、高天神城、長久手、駿府城までの60図のリストアップ作業も行った。

陸軍省城絵図とは？

200枚近くに及ぶ日本各地城郭絵図は平成21年（2009年）11月フランスのオークションに出品された。翌年日本に持ち込まれたが全貌が示されことなく、明治の城郭絵図として、散逸した。平成23年調査の結果、明治5年陸軍省築造局が城郭の存廃を決定する際作成した絵図群と判明、陸軍省城絵図と命名した。この段階で富原文庫が保存できた城絵図は後に追加したものを含めて92城128図である。又、それ

を含めて存在を確認できた絵図は109城173図である。ただ、前年明治4年の調査である関東地区や、フランスで発見時すでに失われていた中国・四国地区、さらに調査時軍営となっていた師団等所在地は調査されていない。これまで、研究会や城絵図展に於いて関係市町村に公開し、高遠城絵図、亀岡城絵図について、現地と陸軍省城絵図の比較検証をしているが、ほとんどの個別絵図の解明はこれからである。

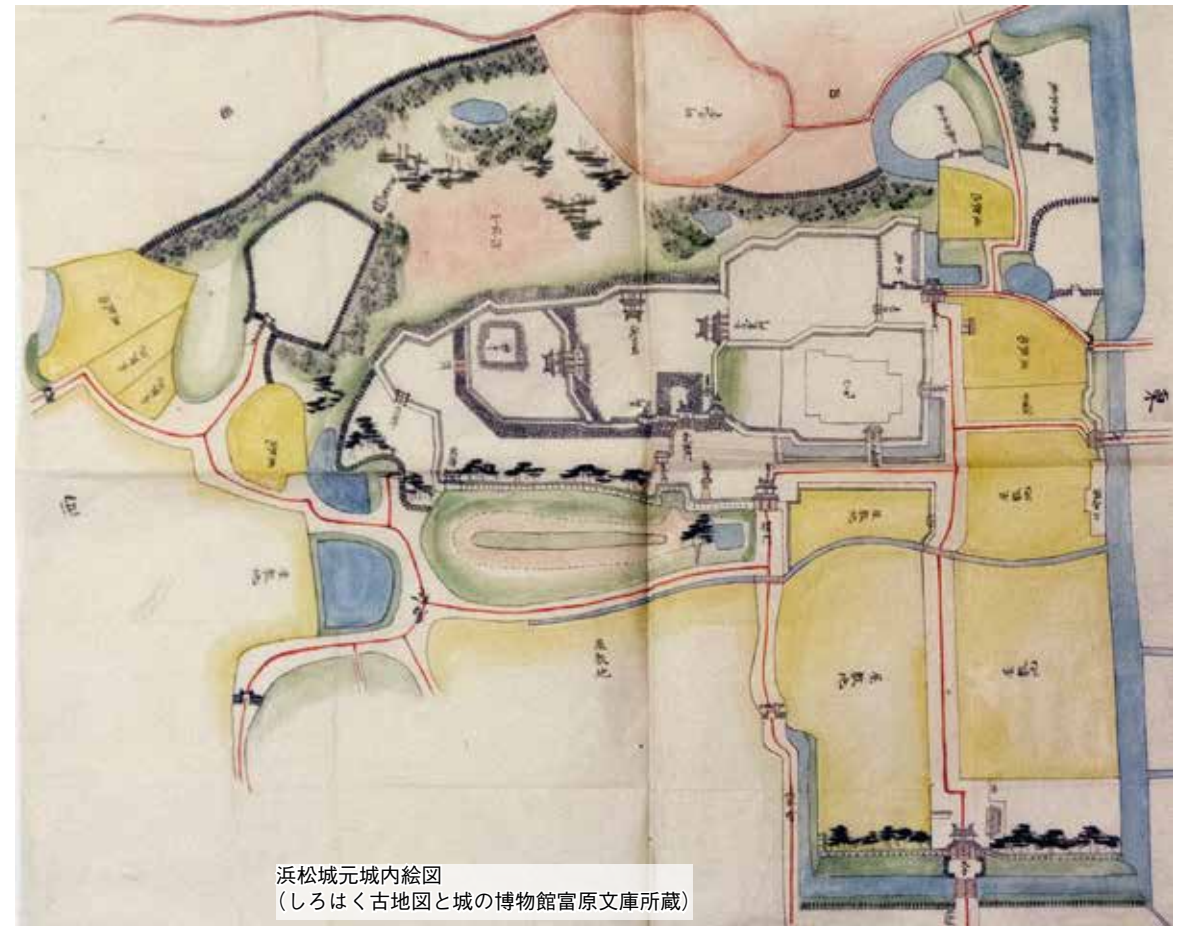
絵図には、明治5年2月28日発足の陸軍省築造局の捺印、明治5年5月

陸軍省城絵図の12の特長

- ①徳川家の城郭を接収した明治新政府が行った全国規模(3府72県→3府302県)の調査であり、資料は数百点に及ぶ。実測に基づいたもので、江戸期の城郭の様子を知る上で資料価値が高い。
- ②調査は、縄張、普請の仕様に加えて、城域の坪数や、残存建築の居住性、坪数など、軍営地としての適性に重点が置かれている。
- ③残存建築の平面図、間取り図、屋根葺図等の記入が詳細である。これは、兵営として利用する際の居住性を意識したものとみられる。
- ④活用整理のための番号が付されている建築が多数ある。焼失した場合は「戊辰兵火」等原因が記入されている。
- ⑤ほとんどの絵図が県庁所在地や元知事住居を明記し、行政機能について、明確にし、利用状況を確認している。制作年代は廃藩置県(明治4年7月4日)以降である。
- ⑥城郭というより、機能を終えた城跡と理解され、江戸詰藩士帰藩のための開墾状況、城の破壊が記録されている。藩政の記録があり、その作成者は府県行政当局である。
- ⑦制作年を明治5年と明記したものが多。陸軍省築造局(明治5年2月28日発足)の印がある絵図がある。同年3月18日から8月までの調査に基づき絵図群が制作されたとみられる。
- ⑧薄葉紙にかかれたものが多く、既存の絵図を元図として、短期間で制作されたものが多。
- ⑨描画精度はまちまちであるが、絵師による清書まで行った絵図は比較的少ない。
- ⑩城郭図以外に、地域により、要害、砲台、軍事上の要地、古城、軍事施設、古戦場図まで含まれる。地域によって作成範囲がバラバラで指示の不明確さ、緊急性を読み取れる。福知山城のように天守各階平面図を残している城もある。
- ⑪城内の軍事施設、練兵場、鉄砲打場、武器蔵、武学校、兵学寮、火薬蔵、修行兵屯所、調練場、銃練場、文武学校、遠町打場、兵隊屯所、営繕方等の記入が顕著である。
- ⑫絵図の作成にはフランス軍事顧問団は関与していない。ただ、フランスとの関係には、検討の余地がある(城絵図がフランスで発見されている)。

作成年月記入絵図が多数ある。結果、これらの絵図測量は正保城絵図を超えるスケールで、明治政府により国家規模で実施された、明治6年の城郭存廃決定に至る調査絵図と判断した。国家規模の城郭の一斉調査にかかわる絵図の存在は、今日まで正保城絵図以外には、その残存を全く知られていない。陸軍省城絵図は。関東大震災や東京大空襲といった度重なる首都災禍により、軍機関本部の焼失とともに、その存在が忘れられ

た幻の絵図群である。城郭の存廃決定に至る、つまり、城郭の存続と破壊を決定する根拠となる内容的に極めて重要かつ詳細な絵図といえる。明治政府による軍制改革、急激な軍事技術の革新による価値観の変貌の中で、陸軍省



城絵図は明治政府が旧幕府の城郭をどう評価していたか、明治以降、今日まで、どのように変貌を遂げたのか、変貌前を物語る貴重な資料である。絵図は明治政府による国民皆兵という軍制改革の中で、その拠点造り、鎮

台の整備、不要城郭の破却による動乱防止という観点で実施された。旧幕府城郭の現状調査記録であった。明治以降の激しい変動の中で、明治5年という定点における全国の城郭の状態を知ることができる。

陸軍省城絵図の作成経過（調査は明治5年3月～8月に実施）

明治5年2月27日兵部省廃止、陸軍省、海軍省設置 城郭は陸軍省管轄
明治5年3月18日築造局から武官等を派遣して城郭、兵器等の実地調査に当たらしめる。同日太政官布告。「今般城郭兵器取調之為メ陸軍省官員各地へ出張、(略)各府県ニ於テ此旨相心得、」(法令全書・京都府庁文書)
明治5年3月18日陸軍省達、「今般城郭兵器等為取調、当省官員各府県へ派出巡廻為致候(略)別紙 1、城郭、堡砦、練兵場等総而兵事ニ関涉シ建築する者ハ土地並厦屋、樹木共悉皆当省管轄ニ候条詳細取調可申出事。但城郭之儀ニ付テハ追々届出候向キモ尚又今般明細可申出候事(後略)」(京都府庁文書・城郭巡視日記・修史余談)
明治5年8月24日に陸軍省は省内の各局に調査結果に基づく城郭の存続、廃止案を示し意見を求めている。(森山127P・法規分類大全)
明治6年1月14日太政官達により、城郭の存廃は布告され、岡崎城、浜松城とも廃城。

(陸軍省城絵図作成規定)

明治5年3月15日陸軍省達・巡検参謀将校職務大略(法令全書・森山)

- 一、各地城塞ノ方並地勢ノ險易ヲ見極メ、攻守ノ便、不便ヲ計リ、暇アラバ絵図ニ認メ可申事
- 一、城中用水ノ多小、家屋ノ有無、平場ノ広狭並濠地ノ模様、游泥乾湿等明細書載セ可申事
- 一、城塞四辺ノ地理、水運ノ有無、山丘森林ノ向背等書載可申事
- 一、其城下市街人烟ノ多寡、馬匹ノ多寡、物品運輸製造等ノ項ヨリ貧陋繁富ノ別、別シテ其地人民ノ重ナル産業ハ何物ナルヤヲ記シ可申事
- 一、其城市ヨリ国境マテ又他ノ国境相通スル道路大小間道共ニ大凡里程聞繕ヒ記シ可申事
- 一、県官ト引合ヒノ節、何レヨリ何レマテ城属ノ地ナリヤ悉シク書キ記シ、図面ニテ取究メ置可申事
- 一、総テ後來万一一揆ナト起ルトキハ味方ニ城ヲ取ルトモ敵ニ城ヲ取ラレタリトモ、其攻守ノ方法等予め存意丈ニテモ記置可申書

(3月18日山県陸軍大輔名で京都府への通知例)

陸軍省達、「今般城郭兵器等為取調、当省官員各府県へ派出巡廻為致候ニ付而者、別紙之件々詳細取調、出張官員へ可申出候事
一、城郭堡砦練兵場等、総而兵事ニ関係シ建築スル者者、土地並厦屋樹木共悉皆当省管轄ニ候条、詳細取調可申出事。但城郭之儀ニ付テハ、追々届出候向キモ、尚又今般明細可申出候事



(上) 陸軍省城絵図 三河国岡崎県図、(右) 陸軍省元岡崎県図 (部分)。(しろはく古地図と城の博物館富原文庫所蔵) 先に作られた上図には三日月状の「丸馬出」が描かれているが、後に作られた右図では壊されている (赤矢印)。



生誕・独立の岡崎城

天文十一年(1542年)十二月二十六日、松平竹千代(徳川家康)は岡崎城内で誕生。六歳からは織田氏、八歳からは今川氏で育つ。永禄三年(1560年)の桶狭間の合戦で今川義元が敗死により独立。以後、11年にわたり岡崎城を居城とした。秀吉家臣田中吉政が文禄元年(1592年)に大規模な改修を行ったとされる。

浜松城は出世城

元亀元年(1570年)、武田晴信(信玄)に備える為に、岡崎城を嫡男信康に任せ、家康自身は曳馬城(浜松城)に移った。武田軍侵攻の際、三方が原に出兵し大敗(元亀三年)。天正十四年(1586年)に駿府に移るまで17年間にわたり在城。歴代城主の多くが江戸幕府の重役になったことから「出世城」といわれた。

浜松城絵図

浜松城絵図は2種あり、1枚は浜松城郭図曲尺1分1間の実測図で規定通り、浜松県が陸軍省将校の指示に基づき作成した明治5年測量図である。125×118cm 彩色絵図、外郭、内郭、本丸跡、花畑の面積が表示される。あと1枚は袋題で浜松元城内絵図とされる39×55cm 彩色絵図である(21ページ掲載)。後者は明治5年絵図というよりも江戸期の浜松城絵図であり、類似図は見られないが、参考に陸軍省に提出されたものと思われる。

浜松城郭測量図は軍営としての居住性調査の為、現存建築に対し、古城地域の米蔵に一番から十番、御城米蔵に十一、十二番、二ノ丸に御殿、土蔵として十三～十六番、大手門に十七番、榎門に十八番、本丸鉄門に十九番、本丸内多門に二十番、菱櫓に二十一番、本丸裏門に二十二番、富士見櫓に二十三番、天守台門に二十四番、清水曲輪銭櫓に二十五番、作佐山煙硝蔵に二十六番が附され、建築の残存を示している。本丸裏門、清水谷門、二ノ丸表門、裏門、明光寺門、明光寺口門、瓦門、内包城門、外包城門は付番がないが城門が描かれているため残存していたと考えられる。この付番は明治5年8月23日の浜松県令浜松城建物払下げ通達御建物番号と符合しない。陸軍省築造局の3月～8月の調査段階のものと思われる。古城や米蔵の土蔵にはこれと別に1～22番の付番がされるもこれは、在城当時の管理番号と思われる。



浜松城郭図 1分1間600分1
(しろはく古地図と城の博物館富原文庫所蔵)

岡崎城絵図

陸軍省築造局に岡崎城絵図は3枚提出された。1枚は元岡崎県と書かれた薄葉紙の絵図であり、1枚は三河国岡崎県、今1枚は三河国岡崎県城郭図と記されている。後の2枚は濃彩で絵師により清書されたものと思われる。いずれも既存の城郭絵図に廃城遺構破却状況を記入したものである。岡崎城は明治4年7月岡崎藩から廃藩置県により、岡崎県となり、11月額田県、5年11月には愛知県となった。岡崎県といわれた時代は明治4年7月から10月までわずか4か月であり、全国的にこの時代の解明は進んでいない。3図共、二ノ丸に県庁と記入され、約80cm角、同一縮尺、同一基本絵図に基づく絵図である。濃彩の2図は表示文字の方向や誤字修正があるものの同一であり、三河国岡崎県城郭図が訂正後の正図と考えられる。両図とも備前曲輪に習兵

所、白山曲輪に練兵場がある。古絵図と比較すると、北曲輪西城門撤去、東曲輪出口馬出左右城門撤去、全体的に多くの土堀の撤去が見られるが、この段階で天守、櫓、城門はほとんど現存している。薄葉紙の絵図は岡崎県ではなく、元岡崎県とされ、明治4年11月以降の額田県時代の絵図であり、正図作成後短期間における城跡の変遷を描いている。すなわち、東曲輪の丸馬出の埋め立て、北曲輪の厩取り潰し、白山曲輪、稗田曲輪における屋敷地、練兵場の畑地化、江戸付藩士の帰藩の際に城跡にも開墾が進められたが、さらに農地化している。防衛機能の低下として板谷曲輪と北曲輪の城柵撤去、大手門北備前曲輪入口城門撤去、備前曲輪の習兵所の屋敷化、黒門外堀の埋め立てと石垣による閉塞等である。なお、岡崎市所蔵の明治5年作成城下町絵図があるが、陸軍省城絵図は本図の城郭部分と同一原図である。岡崎市図

は陸軍省城絵図と比較した場合、東曲輪出口の丸馬出、板谷門枅形、隠居曲輪、東曲輪、三の丸白山曲輪の一部等に土堀が現存し、陸軍省城絵図より以前の状況が描写されている。従って遺構の廃却経緯は岡崎市絵図、陸軍省城絵図岡崎県図、元岡崎県絵図岡崎県図の順番に手繰ることが出来る。岡崎市絵図は陸軍省城絵図の陸軍省提出前の岡崎県側控図と考えられる。ただ、本図もそうである様に、全国の公文書館に所蔵されるこれらの絵図は明治初期の履歴不明の絵図ということで、資料として評価されていない。

岡崎市城下町絵図も明治5年の写しであり、本城各絵図群はいずれも既存絵図に各年代の現状を克明に描いたものである。修理絵図の多くもそうである様に、同一原図に基づき提出図の精度を求めたものと言える。何れ、これらの元図も発見されることを期待している。

富原道晴

1947年大阪生まれ、金沢、東京を経由して、群馬在住。元サカタインクス理事、日本印刷学会グラビア研究会委員、環境対策協議会副委員長。平成10年『しろはく古地図と城の博物館富原文庫』設立、15万点の城郭資料を所蔵、各地で城郭古絵図展開催、各地教育委員会に公開、現役城郭絵図コレクター。関西城郭研究会顧問、日本銃砲史学会会員、東京古地図倶楽部所属。活動記録『古地図と城の泉』月刊メール発行。写真は博物館を囲む土塁。

